

## 第12回北東アジア天然ガス & パイプライン国際会議

ERINA 調査研究部主任研究員  
北東アジア天然ガス開発・利用研究会事務局長  
新井洋史



2011年8月29～30日、モンゴル国ウランバートル市において「第12回北東アジア天然ガス&パイプライン国際会議」が開催された。この会議は、北東アジアにおける国際ガスパイプラインネットワーク建設の促進を目的として設立された「北東アジアガス&パイプラインフォーラム(NAGPF: Northeast Asian Gas & Pipeline Forum)」が2年に1回、北東アジア各国で開催しているものである。NAGPFは

1997年に設立され、国際的な非営利機関(NPO)として活動している。その構成体となっているのは、日本、中国、モンゴル、韓国及びロシアのNPOなどである。日本ではそのための組織として、「アジアパイプライン研究会(APRSJ)」が活動してきたが、2009年末に解散したことに伴い、新たに「北東アジア天然ガス開発・利用研究会(会長:羽矢惇新日鉄エンジニアリング(株)取締役相談役)」が設立された。ERINAはその事務局を務めると同時に、実質的にNAGPFの事務局も兼ねている。

本会議の主要な目的は、需要と供給の両サイドの関係者が、天然ガスの開発・利用と天然ガスインフラ構築における多国間協力について議論を行うことにある。今回の会議には、ロシア、中国、韓国、モンゴル、日本の北東アジア諸国はもとより、欧州のエネルギー研究者など天然ガスプロジェクトに携わる約100名が参加した。冒頭のオープニングセッションに続き、「北東アジア各国のエネルギー政策」、「北東アジア各国のエネルギー及び天然ガスの最新動

<sup>3</sup> 税関特殊監督管理区域とは、中国政府の認可によってほかの地域と厳格に隔離し、税関が該当エリアに出入りする貨物の監督・管理を行う特別なエリアを指す。税関特殊監督管理区域は、大きく保税區、輸出加工区、保税物流園区、クロスボーダー工業区、保税港区、総合保税區の6種類に分けられる。なお、税関特殊監督管理区域の詳細については、別稿にて改めて論じたい。

向]、「天然ガスの輸送」、「天然ガス開発及び利用技術に関する協力」、「モンゴルの国際エネルギー協力」の5つのテーマを設定して、議論を行った。

オープニングセッションでは、ホストであるモンゴル石油公社のアムラー副総裁の開会あいさつに引き続き、各国代表からの挨拶があった。基調講演は、モンゴル国天然資源・エネルギー大臣のゾリグト氏が行った。

第1セッション「北東アジア各国のエネルギー政策」では、韓国知識経済部ガス産業課長のキム・ヨンレ氏をはじめ各国の政策担当者などからの報告があった。各国において、天然ガスの役割を重視する政策がとられていることなどが紹介された。

第2セッション「北東アジア各国のエネルギー及び天然ガスの最新動向」では、各国のエネルギー分野の第一線の研究者などが報告を行った。このセッションでは、日本における天然ガス需要の見通しについての質問に対して、日本エネルギー経済研究所常務理事・首席研究員の小山堅氏が、今年は1,000万トンの需要増になるとの推計を説明する場面があった。今回は会議の様々な場面で、東日本大震災後の日本のエネルギー情勢や今後の見通しに対する各国の関心の高さが感じられた。

第3セッション「天然ガスの輸送」では、各国のパイプライン整備の状況やLNGプロジェクトの動向などについて報告が行われた。

第4セッション「天然ガス開発及び利用技術に関する協力」で行われた4つの報告のうち、2つは中国からであり、

それぞれタイトサンドガスの開発、炭層メタン（CBM）の開発についてのものであった。シェールガス革命とも言われるアメリカでの非在来型ガス生産の急増を意識して、中国国内でも積極的に非在来型ガスの生産を進める姿勢を積極的にアピールしたものと考えられる。

第5セッション「モンゴルの国際エネルギー協力」では、天然ガスに限らず、幅広い分野でのエネルギー協力に関する話題の提供があった。

総括セッションにおいては、会議を総括する文書として、ウランバートルアピール（後掲）を採択して、閉幕した。また、2013年の次回開催国である中国を代表して史訓知氏から挨拶があった。次回開催国ということもあってか、今回の会議では中国からの参加者の積極姿勢が印象的であった。対照的だったのは、ロシアからの参加が比較的少なかったことだ。

この会議は、これまで12回続いており、基本的なアジェンダ設定はそれほど大きく変わっていない。他方で、この間に天然ガスを巡る外的環境は大きく変化し、同時にかつては構想にすぎなかったプロジェクトがいくつも実現してきている。同じアジェンダでも議論する内容は、常に新たな状況を踏まえた展開となっている。個別企業や団体の利害を超えた自由な意見交換の場として、またこうした意見交換を通じた人的ネットワーク形成の場として、貴重な会議であると考えられる。関心をお持ちの企業・団体にとっては、是非、研究会への参加をご検討いただきたい。

#### 「ウランバートルアピール」

#### (The Ulaanbaatar Call for Action)

#### 第12回北東アジアガス&パイプライン国際会議 (NAGPF2011)

- ◆ エネルギーの安定供給は、経済活動及び国民生活を支える重要な基盤である。2011年3月11日に日本で発生した地震は、我々にエネルギー安定供給の重要性を再確認させた。こうした状況の下で、The 12th International Conference on Northeast Asian Natural Gas and Pipelineが、2011年8月29 - 30日にモンゴル・ウランバートル市で開催された。
- ◆ 様々なエネルギー源がある中で、天然ガスは独自の特徴を持つ。まず、比較的クリーンな化石燃料である。天然ガス発電は確立された技術であり、安定的な電力供給に寄与する。同時に、分散型発電など新たな技術開発も進んでいる。世界各地に相当量の埋蔵量が確認されているほか、非在来型天然ガスの開発も進んでおり、長期安定的な供給を保証する資源基盤がある。
- ◆ これらの要因などを考慮し、IEAは2011年のWorld Energy Outlookにおいて、"the Golden Age of Gas Scenario (GAS Scenario)"という大胆なシナリオを提示した。それによれば、2035年には世界の天然ガス需要は現在よりも50%以上多い5.1TCMに達し、世界のエネルギー需要の1/4以上を供給する。
- ◆ 本会議における報告及び過去のNAGPFの共同研究結果をまとめると、2020年ころには北東アジア（中国、日本、モ

ンゴル、韓国、東シベリア及びロシア極東)において、最大年間330BCM程度の天然ガス供給が実現する可能性がある。また、各国の需要の合計は530BCM程度となり、その差の200BCM程度が域外からの輸入となると予想される。

- ◆ 北東アジアにおいて、天然ガスの利点を最大限に活用するためには、以下の条件整備が必要である。
  - ▶ 北東アジア内の資源探査と開発の継続
  - ▶ 北東アジア外の天然ガス資源の利用
  - ▶ 天然ガス輸送インフラの整備
  - ▶ 安定的な取引関係を支える市場環境の整備
  - ▶ 天然ガスの開発と利用を支える北東アジア各国による積極的かつ効果的な政策策定
  - ▶ 既存の枠組みを含む多国間協力の強化
- ◆ これに関連し、北東アジア各国では既に多くの努力がなされ、一定の成果を上げてきた。それらに加え、以下のプロジェクトを含む様々な新たなイニシアチブが実現に向けて検討されている。
  - ▶ チャヤンダガス田開発
  - ▶ 中国－ロシアガスパイプライン
  - ▶ ウラジオストクLNG基地
  - ▶ ロシア－韓国ガスパイプライン
  - ▶ ロシア－モンゴル－中国－韓国パイプライン
- ◆ もとより、エネルギー供給源は多様であるべきであり、各国の事情に合わせて最適なエネルギーミックスを求めていく必要がある。我々は、本国際会議の開催国であるモンゴルにおいて、最適なエネルギーミックスを希求して、様々な努力（国際協力によるものを含めて）が展開されていることを知った。
- ◆ 我々、本会議参加者は、上述のプロジェクトの推進による北東アジア地域社会の互恵的發展に対する寄与を考慮し、各国の天然ガスの開発・利用に関する官民関係者が必要な協力を積極的に行うようアピールする。